

最上徳内『唐太島』について

中 村 和 之

はじめに

小論で紹介する『唐太島』は、北方探検家として有名な最上徳内が著したとされてきた史料であり、現在はライデン大学図書館に収蔵されている。この史料は、一九八八年に京都国立博物館、名古屋市博物館、東京国立博物館で開催された「シーボルトと日本」展に出展されており、その存在は知られていたのだが、全容が紹介されたことはなかった。⁽¹⁾筆者は、同書をライデン大学図書館からマイクロフィルムの形で入手することができたので、ここにその内容を紹介しようとするものである。

一 『唐太島』の内容

『唐太島』は墨書・墨画の紙本で、表紙を含めて二二丁からなり、縦は二〇・二cm、横は一六・〇cmである。⁽²⁾『オランダ国内所蔵明治以前日本関係コレクション目録』によれば、この史料は出島のオランダ商館に勤務した医師、フリッツプ＝フランツ＝フォン＝シーボルトの所蔵品である。

第一丁の表紙の題箋には「唐太島 最上徳内 全一冊」と記されており、右上には「No 202」とペン書きで記されている。第一丁の裏には、やはり右上に「180」、左上に「2」と鉛筆書きらしい字が見える。これはシーボルトがつけた頁数らしい。またこの頁には、紙片が貼り付けられており、それには次のように記されている。⁽³⁾

212. 唐太島

Karafuto sima.

Description de l'île de Sachalin. M. S. Caractères chinois classiques et katakana. Le dernier chapitre avec ses illustrations, copié du livre décrit sous le n. 196. Par Mogami Tokunai. I feuille pliée. s. d.

〔唐太島。サハリン島についての記述。写本。漢字とカタカナ。一九六番に記述された文書より書き写された図版つきの最終章。最上徳内による。フォリオ版。日付なし。〕

第二丁の表には何も書かれておらず、裏には左上に「3」と鉛筆書きらしい文字が見える。また、丸いスタンプが押されているが、頁の谷に

なっているため判読できない。

第三丁表から第二丁裏までが本文だが、ここには後筆と思われる書き加えが見える。いくつかの地名の上に点がつけられているほか、第七丁表に「鯉場見立」、第一四丁表に「ウエンコタン」以下の地名が書き加えられている。また、シーボルトの手によると思われる「？」の書き込みもいくつか見える。ただ、どの部分が後筆なのかを確定できないので、後筆については特に断っていない。なお、第二二丁の「山丹人言語」には、シーボルトによるとと思われる鉛筆の書き込みがあるが、それらはほとんど判読できないため省略した。史料の収載は以下の要領で行った。

- ① 原本の形をできるだけ伝えることを心がけ、文字の訂正や削除の線、傍線やふりがななども可能な限りそのままとした。
- ② 地名のなかには、字と字の間に短い縦線が引かれているが、それらは長音記号とは違うもののように思われる。そのため、長音記号は「ー」で、短い縦線は「|」で表示した。
- ③ いくつかの地名の上に付された点は、「・」で示した。
- ④ 判読不能の字は□で表示した。
- ⑤ 誤りと思われる字は、その右側に訂正した字を（ ）内に記入した。
- ⑥ 頁数を「|」内に表示した。「3 b」とは、第三丁の裏がここで終わることを示す。

カラフト島
唐太島

4

カラフト島ハ宗谷ヨリ海行凡十
五里北ニ有リ往古松井人渡島セ
シヤ否未タ其詳莫ヲ聴カス時ニ
天明五乙巳年七月我往者二船ニ
テ宗谷ヨリ発シ彼島ノ南畔シラ
ヌシト云所ニ到リ尚島中ヲ行巡
ト欲シ陸ニ通路ナク海ハ突々然
トシテ立出タル岩石多ク船舶通
ル莫難ク糧ヲ運ニ據ナク蝦夷舟
ニ糧ヲ貯海岸ニ隨ヘシラヌシヨ
リ西行十余日タラントマリニ到
リ糧尽テ飯ル東行七日シテシン
トコニ到リ糧尽テ飯ル同年八月
宗谷ニ帰ル又明年丙午五月三日
蝦夷人ヲ率ヒテ宗谷ヲ発シ再ヒ
渡ルニ逆風ニ障ラレ遅々而同月
十日漸クノトロニ着ク復シラヌ
シニ到善帥ヲ集メ島ノ尽境ヲ極
ン莫ヲ議談シ 艦 スル中蝦夷人ヲ
俱イ東方ノ地ヲ望視スル莫陸行
五日ニシテ飯趣ス而蝦夷舟五艘
ヲ催シ同月二十日シラヌシヲ発
西行三十日ニシテナヨロニ到リ

[3 a]

[3 b]

[4 a]

5

復一日クスリナイニ過ル茲於
 テ前路ノ宣宣問蝦夷曰此ヨリ長
 ク人跡絶尚海陸至テ難路ニシテ
 容易ナラス凡二月ヲ經テヲツチ
 シニ到ルベシ粮乏ク強テ進歩ス
 ル莫能ハス空クナヨロニ販り爰
 ニ暫ク滞居ス而近辺ノ酋帥ヲ狩
 集メ土石ヲ盛テ地境ヲ象リ或ハ
 砂濱ヲ均シ方程ヲ画シ或ハ株ヲ
 建テ遠近ヲ計ルニ宗谷ヨリ渡着
 セシノトロハ南頭ノ地ニシテ東
 西ノ分境ナリ是ヨリ西ニ次地名
 ク井 東部ノ蝦夷ハ古宗谷ニ渡海スル
 ニ此処ヨリ船ヲ発シタル所ナリ
 ・シラヌシ 大ナル泊アリ西部ノ蝦夷ハ
 此処ヨリ宗谷ニ渡海スル也
 クス子ンルン クワトリ
 ・ヲツトチシ アカラベシ
 ・シヨ―ニ ・ウエンチシ
 フーキナイ フーレチシ
 ・リヤウシナイ トマリケシ
 ヲマナイ ・ヌシヨナイ
 アヅイヤタナイ
 ・ナヤシ 西海ニト、馬ア
 リ凡七里ヲ阻ツ
 ・シラリウシナイ

[4 b]

[5 a]

[5 b]

7

鯨場見立

ヲテレ レフンソヤ
 ・シボシナイボ
 シクシナイボ
 マツランナイホ
 ・ベニ
 ・シイナイ
 ・ナイボ
 ・キトウシナイボ
 ヲン子コル
 トコシナイ
 ・ツンナイヲロ
 トンナイヲコ
 ・ヲントゲシ
 ・セトシナイ
 ヲコ
 ・タラントマリ
 ・ヲホトマリ 左右ニ山寄出テ風波ヲ防キ海水岩下
 ニ至迄深シ大船洋中ヨリ直ニ来ニ善
 ・ビリリ
 ・キトウシナイ
 ・テキ
 ・エンルンコヲマナイ
 ・ヲニチウボ
 ・ラリマカ
 ・アサンナイ
 ・ウコウ
 ・トブシ
 ・アツケベシ
 ウエントマリ

[6 a]

[6 b]

[7 a]

・ヲラウ子トマリボ

・トマリケシホ

・ヅンナイケシ

・トウキタウシ

トヲロ

ツコン

ノトロ

・トブ

・カタツシヤム

シラロ、

[8 a]

・アルコエ

ベウテケシカ

ヲテツコロ

レフンソヤ

・ウウナイ

ホロコ

・シラロ、

ナヨロ

平原廣々トシテ中
ニ大河流レ海ニ落

ツ暫ク水上迄蝦夷船通ス大船モ此河ニ入レテ泊ルニ於テハ
風波ノ憂アルヘカラス 凡シラヌシヨリ二百五十里ニ近シ

・クスリナイ

蝦夷ノ戸口乏ク河ニ臨テ二三戸有ノ
ミ凡七八里河浜テ周回十余里計ノ湖

水アリ冬ニ至リ氷ルヲ喉テ其湖水ノ水上ヲ渡リ又山路數峯

ヲ越凡行程三十日余ニシテ東部ノ海濱タライカニ通スト云

ヲリカタハ山中ノ夷住ニテタライカヨリ三日前ニ在リ濱端
ノ寓舎ト聞クニ大ニ違イ海濱近キ処一日路ヲ阻ツ名曰ウイト

・マンムシラボ

ポロナイホ

ウンベヲマナイホ

クラシノナイホ

モエンルンボ

エト子ナイ

ヲウコナイボ

[9 a]

[8 b]

[7 b]

エベシイ

アシ子ンルン

ラキリケホナイ

ウツシーユ

ワーツカフンナイ

此処ニ川有
アリ悉水赤

エバラエンルン

ウタシウシ

海中秀タル
岩寄アリ

ネホキエシルン

ウタシウシ

チフタウシナイ

ロカレホツケ

ノーツシーヤム

海中ニ秀タル
岩寄アリ

・ルクシナイ

・ヲタシーユウ

・ライチシカ

ライチシカハ山川ノ名ヲ以テ地号ト
ス海濱ヨリ十里余累々タル山中ニ有
テ島中ニ秀タル高嶺ヲライチシカト云其
麓ヨリ海ニ落ル川ヲライチシカト云フ

・コタンツルナイ

エジャラン

ウエンルエシヤン

ウソロ 夷

ウツシーウ

ウシトマナイ

・フローチ

・ポロケシ

・テモエ

・エシドリ

・モロ、チ

・リヲナイ

シーヤツコタン

ソーヤ

ヨツキナイ

[10 b]

[10 a]

[9 b]

シ中中コタン 夷

13
b

イ子ヌシナイ

ヲシヨイコヤル

ロレイ

ホシナイホ

トウロハケ

ナイフツ
大河アリ
夷舟通ス

ナイボロ

トロナイ

サツサツ

ホロエンルン

ウヌンコエ

ア井

ヲタトム

ナイツキ

[14 b]

イ子
山ヲヌシナイ 夷

シヨシムナイ 夷

ヲシヨイコル 夷

ロレー 夷

サツツー

ホシナイホ 夷

ホロエン

トールハカ 夷

ナイブツ 夷

ヲタトム 夷

ア井

ヌイホロ □

ヒヨロ

リシツイ 夷

マーヌイ 夷

[14 a]

コヌ井 ウワリ

マインコタン

ウノ二軒 ベシーヨロ 一家

ノーツシーヤム 一家 ヲリカタ 暫山中ニ入テ
蝦夷屋アリ

シイ、 コタンケセ

タライカ シレトコヨリタライカ迄海岸ノ行程凡二
百里余ト云タライカヨリ西部ヲツチシ迄此間ハ人跡絶シ海岸不通ナル故ニ不詳ヲツチシヨリ山路ヲ以
考ルニ凡里程二百里有余ナルベシ

以上東カラフト、云周回千里都

テ風土産業ハ元蝦夷地ニ異ナラ

スト雖モ近処ハ宗谷ニ從ヒ遠処

ハ山丹ニ隨ヒ交易ス故ニ半ハ山

丹ニ親ミ彼地ノ風ニ移リ家毎ニ

犬ヲ多ク畜犬ニ船ヲ牽カセ或ハ

橇ニ乗テ犬ニ牽カセ犬ヲ用ユル

夏午馬ノ如又冬中ハ犬ヲ以テ第

一ノ食トス

山丹之説

山丹ハ朝鮮與韃靼ノ間ニ寓ス今

按ルニ高麗ニ夷丹在リ其地開ケ

テ夷丹退キ山ニ隠ル詩奈風ニ曰

顔ハ渥丹ノ如又赤族ヲ夷丹ト曰

唐韋后力傳ニ曰ク契丹ハ本東胡

ノ種鮮卑山ニ居ス其後國號ヲ遼

[16 a]

[15 b]

[15 a]

ト爲ト謂リ日本東夷開テ陸奥ノ
國ト成ル其未タ開ケサル所謂蝦
夷地ナリ是ニ比スレハ夷丹ノ如
キ者山ニ隱レ潛ヲ以テ山丹ト謂
ナルベシ時ニ大明^天丙午年五月我
往者カラフト寫ヲホトマリニ到
ルニ蝦夷人告テ曰山丹人二十一

[16 b]

人此地ニ来居スト則蝦夷ノ酋帥
ヲ遣シ召シ出スビヤンコ
（遣） 産ニテ山丹ノ
長ナリ則千長ヲチヤンケト云
マンチウニ從ヒ扶持セラル由
スル者ニテ役名ヲ
カシンタト云フ キンタカ
ツワント云所ノ
ギヤ
ク ビヤンコカ僕ニテ元来
蝦夷地ノ産ナル者ナリ
以上四人使ニ隨ヒ
来リ合掌シテ 羣^{ヒサマツキ}テ我往者ニ相見

[17 a]

ユ茲ニ於テ地理風土ノ夏ヲ問ニ
蝦夷ニ等シク文義無ク言語異ナ
レハ蝦夷人ヲ以テ通辞トナシ尋
聞スルニ則ビヤンコハ山丹ノ長
ニシテ外ニ其地ノ守護人ナク最
マンチウニ屬シ^{（シ）}マンチウ人来テ
交易ヲナス夏一年一回而テ還ル
山丹人マンチウニ往ケハヤウキ
関ヨリ内ニ徘徊スル夏ヲ許サス
又カラフト寫ノナツカウヨリ海

[17 b]

上一日ノ渡リヲ經テ彼地ニ着岸
ス海濱三日山路八日溪間ニ出テ
此水流ニ隨ヒ一日ホーウハト云湖
水アリ其辺邊リテ五日ニシテキ
ンチバクニ到ル
此ヨリ湖上ヲ渡ル夏二日ニシテ

[18 a]

マンガウト云大河ニ到リ
知ラスト云此今度魯齊亞人ノ語ヲ聽ニギヤフタヨリ流レ出テ
コロータラハンエリスコイト大唐ノ界ヲ過テ東海ニ落ルアモル
ト云大河アリ其支流ナルベシ此流ヲ界トシテ向岸ハマンチウノ
地ナリト云然リト云此ヤウキ関道ハ岩兀トシテ人跡絶
是三十日泝テマンチウノヤウキ
関ニ到ル山丹人交易ノ為ニヤウウ
キ関ニ到ル時ハ室内ニ入テ他行
ヲ許サス故ニマンチウノ地理更
ニ知ル夏能ハスト云又山丹ノ地
廣^{（狭）}狭ヲ尋ヌルニ東南ニハ海ヲ帶
西ハ大山嶺々累々トシテ其限ヲ
識ラス今人跡通スル地ハカラフ
ト寫ノ^半羊ニ過ヘカラス人物所産
俣ニ乏ク島中獸ヲ狩シテ喰ヒ其
皮ヲ集メテ以テマンチウニ贈リ
僅マンチウノ穀及ヒ紺青玉ノ類
ヲ求テ又是ヲカラフト島ニ携ヒ
渡リテ蝦夷ト賣買スルヲ以テ業

[18 b]

[19 a]

トスト云人物ハ朝鮮人ニ相似テ
携来タル弓箭等モ亦蝦夷ト異ナ

レハ僅ニ茲ニ圖ス

着物 唐木綿ニテ仕立
ボタンカケナリ

履物 上ハ海豚ノ皮
下ハ蛙鱗ノ皮

〔図一〕

〔20 a〕

着物 鹿皮犬皮ニテ
仕立タルモノ也

〔図二〕

〔20 b〕

弓 鯨ノ髭ト木
ニテ作り 弦 鯨ノ髭ト
糸ヲ合ス

矢 粕尾ニテ四羽
ニ作ル

〔図三〕

鍵 刃金ナリ
彫モノアリ

〔21 a〕

于時

天明六丙午九月

甌岳 子負

〔21 b〕

山丹人言語

ホツトー
十徳 緝山丹錦

ボブシユ
唐木綿

チヤン
赤地錦

シヤハリ
縐子地織物

カシユン
黄色織物

チユ
青玉
ラクタ
エイ
アラキ
酒

タエ
煙箭

チウ
火打鉄

バダ
葛草

ブリ
米

ヒ
ニ
耳鐙
ケ
カリ

ギタ
鎗

チロ
針

ホタンシユ
商

スルシヤ
孤皮

ゲウフヤ
氷豹

シヤツペイ
斧

カラ
海瀬

セツボ
木狗

ホタシイ
鐵類

ヲニヲ
鎗

ホ
夷刀

フンジ
弓

チヤツ
矢

ウンター
船

ゲウレ
車

ナモ
海

ガルン
象股引
長踏

ワタ
波

バクテイ
開

タヲ
火

サンヤ
煙

モウ
薪

ホタ
碗

アツト
是

ウタ
鞋

シヤルンベ
坐

ウレカ
宣

ヲロツケン
惡

チヤエイ
平人

カ
侍

ヂヤンケ
上人

トンビ
日月

ヲモ
一

ジュライ
二

チヤツポ
三

ヱライ
四

ツヂヤ
五

ヌング
六

ナ
七

ジャク
八

フユ
九

二 『唐太島』と『蝦夷拾遺』及びシーボルト『日本』との関係

『唐太島』は最上徳内の著書とされてはいるが、天明五、六年に樺太を調査していることからみて、これは徳内の著作とは考えられない。また、佐藤玄六郎『蝦夷拾遺』亨之巻のカラフト、および同書別巻の山丹人の説とほぼ同じ内容である。これは、どういうことを意味しているのだろうか。

田沼意次の命で派遣された天明の蝦夷調査隊は、北海道東部から国後・択捉島を担当した東蝦夷地隊と、宗谷から樺太を担当した西蝦夷地隊、それに松前留守隊に分担が分けられている。それぞれの中心となったのは五名の御普請役で、東蝦夷地隊は山口鉄五郎・青嶋俊蔵、西蝦夷地隊は庵原弥六・佐藤玄六郎、松前留守隊は皆川沖右衛門が率いていた。最上徳内は、東蝦夷地隊に属していた。天明五年に樺太に渡ったのは、庵原弥六と下役二人である。庵原らは海岸づたいに九〇里ほど進んだが、食糧などが不足したため宗谷に引き返した。一方、佐藤玄六郎は下役一人を連れて奥蝦夷地を調査した。庵原弥六らはこの年宗谷で越冬したが、寒さのために庵原ほか五名が死んでしまうという大きな犠牲を出した。翌天明六年に、第二回樺太調査のために派遣されてきた大石逸平は、食糧を十分に用意していたため、前年より数倍北へ行くことができた。こ

のように天明の蝦夷調査隊は大きな成果をあげたのだが、田沼の失脚によって天明六年十月二八日、突然中止されてしまった。そのため、山口鉄五郎ら関係者五名が共同でまとめたと思われる『蝦夷拾遺』は、生き残った四名が各一部ずつ持つという状況であつたらしい。

最上徳内が『唐太島』を所持していた理由は、彼が天明の蝦夷調査隊に所属していたためであり、同書が誤って最上徳内の作だとされたのは、「千時天明六丙午九月、甌岳、子員」と記されているからであろう。

「子員」は徳内の字、「甌岳」は号である。なお、『唐太島』の日付である天明六年九月には、天明の蝦夷地調査は継続中であり、徳内はまだ蝦夷地に滞在していた。佐藤玄六郎による『蝦夷拾遺』の序は、計画が中止されたあとの天明六年閏十月の日付である。『唐太島』の日付が信じうるものだとすれば、『唐太島』は『蝦夷拾遺』の作成の経緯を知ろうえて、貴重な史料ということができよう。

なお、最上徳内とシーボルトとは、一八二六年にシーボルトが江戸に参府した際に面会しており、あるいは『唐太島』はこの時に最上徳内からシーボルトに贈られたものかもしれないが、この点ははっきりしない。さて、さきにも述べたように、『唐太島』には、シーボルトによると思われる書き込みがあり、シーボルトは『日本』を作成する過程で『唐太島』を利用したと思われる。事実、『日本』第一編第五章には、つぎのような記述がある。

十七世紀の初め、松前の奉行公広侯の命令で企てられた樺太遠征があつてから、この島をはじめて訪れたのは最上徳内であつた。この人は当時將軍に仕える武士であつたが、天明五年七月（一七八五年

八月)、蝦夷の北端宗谷から商船で白主(クリリオン岬に遠くはないところ)に出向き、そこから内陸への探検を企てた。しかし進路がないことがわかったので、彼はさしあたって海岸沿いに旅することにした。しかも岩礁が散在する沿岸は大船では危険であったので、アイヌから借り入れた小舟に乗りかえた。白主から彼は十日間も樺太の西岸を北上し、タラントマリ Tarantomari(つまり北緯四六度五〇分のところまで進んだ。ところが食料が不足して彼はここから帰らねばなかった。その後また彼はアイヌの小舟で能登呂岬(クリリオン岬)の東と知床岬(アニワ岬)までの亜庭湾の沿岸を訪れ、八月八日(九月)ふたたび宗谷に戻った。翌年、最上徳内は樺太への二回目の旅行を企てた。五月三日(六月)、彼はかなりの人数のアイヌ人とともに宗谷岬を出発し、七日間の非常に苦しい航海のうちに樺太の南端にある能登呂岬に到達した。ここから白主へ行き、その他の酋長に島内を旅行する許可を求めた。この旅行は能登呂岬の東岸の地方に限られることになった。引き続き彼は、島の西岸沿いの旅を準備した。これは北へ向かって島をできるかぎり調査するためであった。五月二十日彼は五隻のアイヌの舟とともに白主をあとにし、進路を大泊へととった。その住民はアムール地方(山丹)から移住したものであると聞いていたので、彼らから樺太の北部や山丹、アムール川口についての情報を得ようとした。さらに西岸に沿って三十日間も北上して名寄に至り、そこから久春内へと航行した。この場所は同名の川の口にあり、およそ北緯四八・五度である。ここで彼は、この次の見るべき場所はオチシ Otsi といて、

山丹人と原地人の家が五十軒ある村であるが(これはラ・ペルーズのいうジョンキール湾の南端でサモン急流の上手、北緯五〇度五分にある)、なお三十日間の旅をしなければならぬほど離れており、沿岸は住む人もほとんどなく、そこへ行く航海はすこぶる危険であると聞かされた。そこで彼は、旅をさらに続ける計画を中止して名寄に戻った。ここで彼は、内陸へ向けての遠征を酋長たちの案内で何度か試み、境界石や道程標を設置し、測量・観測した。^{*}この二回の旅行は記憶すべき探検であつて、日本人はこれによつて樺太について初めての地理的報告を受けることになったが、それはラ・ペルーズがこの海域に出現する以前に行われたことである。その後、何年のことかは詳しくわからないが、徳内はなお何回かこの島を訪問している。すなわち同島の西岸ラツカ、つまりボーダン岬の先の北緯五二度の地点まで達している。

シーボルトは*の位置に、「同じ徳内の樺太と山丹の観察記録。前掲目録(『シーボルト蒐集日本書籍・手稿目録』のこと、引用者注) 一八〇番(最上徳内『唐太島』)」という註を付している。¹⁰⁾『唐太島』の第一丁裏には「180」とあり、これは『シーボルト蒐集日本書籍・手稿目録』の番号と同じである。『日本』の内容からみても、シーボルトが本書を参照したことは疑いない。また、『日本』第十二編第一章には、

最上徳内の旅行記によると(『日本』I「日本人による自国領土およびその近隣諸国・保護国の発見史の概観」七六頁参照)、山丹の地は黒竜江の右岸にあり、この河といわゆるタタール湾の岸に沿つておよそ北緯五〇度のところまで広がっている。徳内によると、山

丹は新しい名称である。以前は *Ian* あるいは *Kian* と呼ばれていたというが、これは赤縞の未開人という意味である。中国人の情報によると、長白山脈の東部にはキタン（契丹）という民族が住んでいた。七〇九年から一二五年まで中央アジアの東部での支配的民族は遼あるいは契丹の人びとである。文化が進むにつれて野蛮な人びとは岸や平原を捨て去り、山地に引き返していった。このことから彼らは山丹、赤い山と名づけられたのである。日本の原図に従って複写された日本地図は、レランドによって前世紀初頭にアムステルダムで R ウント J・オッテンスで刊行されたが、この地図にはすでに、北方大陸に中国文字で韓唐と表記された土地がのっている。⁽¹¹⁾とあり、シーボルトが『唐太島』を最上徳内の旅行記と考えていたことは明らかである。

さて、シーボルトのいう最上徳内の樺太旅行が事実でないことや、この部分の内容が『蝦夷拾遺』と同じであることは、蘆田伊人・箭内健次両氏や皆川新作氏、宮崎道生氏らがすでに指摘している。蘆田・箭内両氏は、シーボルトの誤りについて「シーボルトが思ひ誤つたものか、又徳内自ら記し又告げたものかは判然としな⁽¹²⁾い」としているが、シーボルトが『唐太島』に「甌岳、子員」と記されているのを見て、同書を徳内の著作と誤解したためである可能性が高い。

なお、シーボルトは『蝦夷拾遺』も参照しているのだが、にもかかわらず彼が自分の間違いに気づかなかった理由は不明である。シーボルトは、『日本』を作成する過程で草稿をいくつか残している。たとえば、ハーグ国立中央文書館所蔵の「一八二三年より一八二八年に至る日本で

下名等によりて研究された概要」という文書のなかに、「最上徳内 M. Tokan による樺太・蝦夷、山丹 *Santan* に関する報告」がある。⁽¹³⁾ また、ベルリン日本学会に「樺太、山丹記。我が旧友最上徳内の彼地への旅行日記の抜粋」というシーボルトの自筆原稿が所蔵されていたという。⁽¹⁴⁾ これらの草稿と、『唐太島』・『蝦夷拾遺』との関係の解明が待たれる。

おわりに

以上のべてきたように、『唐太島』は最上徳内の著作ではないことが判明した。一方、日付の関係から、『唐太島』を『蝦夷拾遺』の写本と断定することもできない。おそらく、『蝦夷拾遺』の原稿の一部を写したものと考えられるが、今の段階ではあくまで推測の域を出ない。『唐太島』は、天明の蝦夷調査隊に関する貴重な史料であり、『蝦夷拾遺』の作成過程を知る上でも貴重な手がかりを与えてくれる。しかし、シーボルトがこの本を入手した経緯、『日本』を作成する際の利用のされ方など、今後明らかにしなければならない疑問点も多い。さらに、後筆についての考察も必要である。今後は、原本の調査をふまえての研究がのぞまれるが、これらの点については今後の課題としたい。

註

(1) 『唐太島』は、これまで日本国内で存在が知られている最上徳内の著作には含まれていない。『古文書近世史料目録』第一号、村山市楯岡最上徳内史料（山形大学附属博物館、一九七八年）、及び高木崇世編

『最上徳内関係文献目録』（私家版、二〇〇〇年）を参照。

- (2) 京都国立博物館・東京国立博物館・朝日新聞社編『シーボルトと日本』（朝日新聞社、一九八八年）一九〇頁。

- (3) H. Kerlen, *Catalogue of Pre-Meiji Japanese Books and Maps in Public Collections in the Netherlands*, J. C. Gieben, Amsterdam, 1996, p. 337.

786. KARAFUTOTŌ 唐太島 UB212

Manuscript. Author: attrib. to Mogami Tokunai 最上徳内 (1754-1836)

Collation: 1 vol.; 155×202; 21 sheets, not numb, text dated: Tenmei 6 (1786); not signed.

Description of Sakhalin. KSM: (chizu 地図) -Shiboruto: no. 156, p. 190 ; SK: no. 94, p. 115

- (4) ライデン大学図書館の Hans van de Velde 氏の指示によれば、この文章はライデン民族学博物館の前館長である L. Serrurier 氏によるものである。

- (5) 大友喜作編『北門叢書』第一冊（北光書房、一九四三年）二六八～二七二、三〇八～三〇九頁。

- (6) 大石慎三郎『田沼意次の時代』（岩波書店、二〇〇一年）一四六～一六六頁。

- (7) 皆川新作『最上徳内』（電通出版部、一九四三年、一九九三年復刻版）一一頁。南満州鉄道株式会社・弘報課編『東轅紀行』（満州日日新聞社東京支社出版部、一九四二年）一三四頁。

- (8) 註五大友書、二五〇頁。

- (9) フィリップ・フランツ・フォン・シーボルト（中井晶夫訳）『シーボルト「日本」第一巻（雄松堂、一九七七年）二五三～二五四頁。

- (10) 註九シーボルト書、二九〇頁。

- (11) フィリップ・フランツ・フォン・シーボルト（加藤九祚他訳）『シー

ボルト「日本」第六巻（雄松堂、一九七九年）一五頁。

- (12) 蘆田伊人・箭内健次「シーボルト作成の地図」（『シーボルト研究』岩波書店、一九三八年）四六五～四六七頁。

- (13) 註七皆川書、三五七～三六四頁。

- (14) 宮崎道生「最上徳内とシーボルト」（『シーボルトと鎖国・開国日本』思文閣出版、一九九七年）一三六～一三八頁。

- (15) 註一二蘆田・箭内論文、四六七頁。

- (16) 註一シーボルト書、一〇五頁註八。

- (17) 板沢武雄『シーボルト』吉川弘文館、一九六〇年（一九八八年新装版）九〇頁。

- (18) 註一二蘆田・箭内論文、四六五頁。

【附記】

本稿を草するにあたり、田端宏、小口雅史両先生には史料の判読について、廣瀬龍太先生にはフランス語の訳についてご指導をいただいた。また、Hans van de Velde 氏には史料の複写について多々ご配慮をいただいた。あわせて感謝申しあげる次第である。

（なかむら・かずゆき 函館工業高等学校教授）



图2 第20丁裏



图1 第20丁表

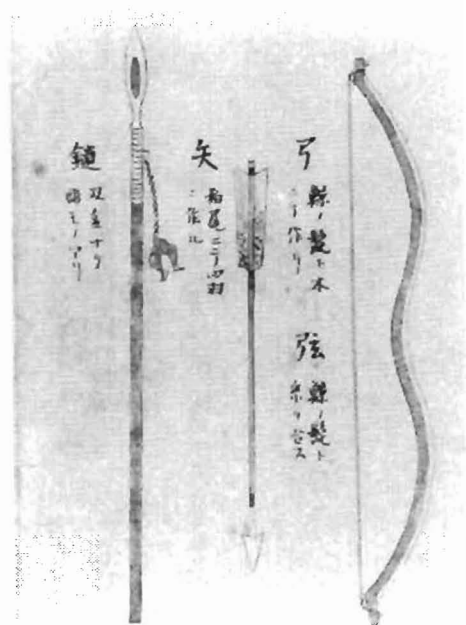


图3 第21丁表